クイズ・メローネ

桝田珪赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クイズ・メローネ

【Ｎコード】
Ｎ６３１７Ｙ

【作者名】
桝田珪赤

【あらすじ】
意味不明な言動を繰り返すメローネと、それに苛立つギアッチョ。そして何故かメローネの言っている事が分かるリゾットの話。メローネのテンションが高いです。

ギアッチョは氷のような男だった。
だから、メローネがいきなり「なんか、オレ達のチームってオレ以外全員頭おかしいよな」と言い出した時には猛烈に怒り狂いながらも、自分だけはまともだと信じていた。頑なに。
「…死ね」
「ヒッド！ほらね、ギアッチョ頭おかしいじゃん」
時々、ギアッチョはメローネに死んで欲しいと思う。そんな時はメローネに触りたくもないから、殺したいとは絶対に思わない。単純にシンプルに、純粋な望みとして死んでくれと思う。
メローネの頭がおかしいのは今に始まった話でもないし、それ以上に頭が良いのもチームの誰もが知っている。最初、ギアッチョは初めてメローネを見た時に、コイツは一体何なんだと眉根を寄せた。見た目が大人しい造りの顔だから、黙っていればモデルのようにさえ見える筈なのに、醸し出す雰囲気が全力で異常だった。案の定、ギアッチョの予想通りメローネは変人どころか変態の域に到達するような精神障害者だった。
普段メローネは静かに取り留めのない内容を話すのを好んだが、真夜中だとか、何の変哲もない朝食を見た時だとか、そんな何でもない時にいきなり、狂ったように笑い出したりした。呼吸困難を起こすようなレベルで笑い転げて涙まで零すメローネを、ギアッチョは理解出来ない。寧ろ理解したくない。他のメンバーも同様にメローネについては諦めるか割り切るかしていて、唯一の例外はペッシだが、これはひたすら怯えているだけだったりする。

「リーダーも頭おかしいしプロシュートもホルマジオもイルーゾォもソルベもジェラートも頭おかしいじゃん。あ、ペッシだけはまだまともかも。あ、でもやっぱりペッシもプロシュートと同族だから頭おかしいや」
「テメェ以外全員まともだろうが変態」
「いーや。オレ以外全員頭おかしいね」
尚も言い張るメローネに、無視すべきだと分かっているのについ相手をしてしまう。年齢が近いっていうのは便利なようでいて、こういう時に厄介だ。ギアッチョはメローネと仲が良い。
「基準はなんだよっ！基準はよォ」
「だってオレ、人殺した事ないし」
「あ？」
「ベィビィ使った殺ししかやった事ないんだよ」
「だったらペッシだってそうだろ。そもそもスタンド使って殺しやった事すらねーじゃねーか」
「ペッシはプロシュートと同じだからアウト。頭おかしい」
益々訳がわからなくなって、ヘラヘラ薄笑いを浮かべるメローネの顔に飲みかけのコーヒーごとカップを投げる。生意気にもかわされて、床で割れた。
「だから、ペッシがプロシュートと同じってのは何だよ。有り得ねーだろ」
さっきから出来るだけ流しておきたいと思っていた部分が次々と掘り起こされて、ギアッチョの苛立ちが雪玉を転がすように増幅してゆく。
「いや、同じだよ」
もういい、ぶん殴る。
ギアッチョが椅子から腰を浮かせようとした時に、ドアが開いた。
「今の音はなんだ」
「オレ以外全員頭おかしいっていう話」
「…ギアッチョが割ったんだな」

会話が全く噛み合っていないのに、リゾットは部屋の状況を見ただけで事態を把握する。元々、適応能力が高いのだ。だから先導するプロシュートでも補修するホルマジオでもなく、リゾットがリーダーなのだと思う。向き不向きの問題だ。
「そう。ペッシとプロシュートが同じでオレだけ頭おかしくなくて、やっぱりオレ以外全員頭おかしいっていうのを話してたら、ギアッチョがキレた。だからやっぱりギアッチョは頭おかしいんだ」
「……ああ、成る程、そうか。気付かなかったな。ペッシもそうか」
「リーダー鈍い」
あはははは。メローネが無邪気に笑う。難解な問題を支離滅裂な順番で出題するのに、メローネは自分が言いたい事が正しく理解されると喜ぶ。何度かメローネが書いた報告書を読んでいるから、決して言語系に障害がある訳ではないと知っている。それが余計にギアッチョを苛立たせる。
「リーダー、分かったのかよ」
「いや…感情に任せて人を殺した事があるかどうか、という事だろう。尤も、ペッシはまだだろうが…」
「さっすがリーダー！オレの事ちゃんと分かってくれてる！ディ・モールト！ベネ！愛してる！」
ノリノリで投げキッスをするメローネの姿に罵声を浴びせるべき所を、ギアッチョはもう呆れて口を開くしかない。
意味不明だ。メローネもリゾットも。
目の前に居る二人が宇宙人のように思えて、やや危機感を覚える。
「ギアッチョ、オレはさ、ベィビィが初めて現れた時、兎に角いじくり倒してみたんだよ。いきなり机の上にあってさ。そしたら血を使うわ女使うわでもう大変！最高に面白い玩具でさ、それから色々あってここに来たけど、だからキレて人を殺そうとした事もないし人を殺した事もないんだ」
な？オレだけ頭おかしくないだろ？
微妙に首を傾げるメローネの発言は相変わらず纏まりがない。が、

要点を整理すると、キレて殺しをやった事がないから自分はまともだって主張してる訳だ。
「どっちにしろオメーが変態な事に変わりねぇだろうが！」
「うん、やっぱりギアッチョはイカレてるね」
「殺す！」
「落ち着けギアッチョ」
ホワイト・アルバムを半分程装甲しかけた所でリゾットがギアッチョを制する。メローネはといえば、火種を撒いた張本人にも拘わらず黙って部屋を出ていった。
「って、何で居ねぇんだよ！クソックソックソッ…！」
「しかし、態度はああだが、メローネの言っている事も一理あるな」
「リーダーまで頭イカレたのかよ！？」
「…落ち着け。要は、一般人と比べた場合の問題だ。普通の人間は例え激情に駆られたとしても憎しみの相手を殺さない。メローネの一番最初の殺しが思い掛けない事故のようなものだったとしたら、尚更だろう」
そもそも、比較対照の前提からして捉え方が違うんだ。リゾットが説明を続ける。
「なら、今のアイツは何だってんだよ」
「不謹慎ではあるが、恐らくは遊びと同じ感覚だろう。加えて、ベィビィ・フェイスはメローネの意志に沿うようなスタンドではないからな。誰かを殺すように仕向けても、誰かを殺すのはベィビィ・フェイスの意志そのものだ。例えメローネが憎しみを持ってスタンドを使っても、メローネの憎しみとベィビィ・フェイスの行動には繋がりがない」
「…ペッシとプロシュートが同じ、ってのは」
「プロシュートは見ての通りだが、ペッシもあれで中々激情型だ。本質的にはプロシュートと似通った部分がある」
この部分に関してはまだ、リゾットもしっくり来ない部分が多いらしく、曖昧に締め縊る。

つい二人でじっくりと考え込んでしまってから、はっと気付いて話を再開する。
「っつーかよォ、リーダー、あんなので何で分かるんだよ」
「大体はクイズのようなものだ。普段からメローネの話を聞いていれば、パターンが分かってくる」
先程から、ギアッチョは正直に言うとあのメローネに付き合ってやるリゾットも立派な変態だと思っていたのだが、仮にも人間をクイズのようなものと断言する辺り相当だな、と認識を改める。普段余計な話をしないだけで、リゾットも結構な毒舌家だ。
「あれでメローネの考えは的を得ている事が多い。喋り方は慣れるまで面倒だが、嘘を吐く事はないから、ある意味では楽な相手だな」
嘘を吐かないという点に、ギアッチョは心底驚いた。メローネ程胡散臭い人間も他に居ない。どうしても嘘が得意そうなイメージがある。
「プロシュートを相手にする方が、よっぽど面倒だ」
ぼそり。呟いてからリゾットが仮眠室へと消える。よくよく見てみたら目の下に隈が酷かったので、仕事を片付けたばかりだったのだろう。悪い事をした。
「……」

これをきっかけにメローネの話をきちんと聞こうとして挫折をした挙げ句にキレたギアッチョが水道管を凍らせて、メンバー全員から袋叩きの目に遭うのが丁度二十四時間後の話。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6317y/

クイズ・メローネ

2011年11月19日10時15分発行